

## 『遊天龍峽記』

余、諏訪湖の明秀を愛でつつ、天龍川を沿うて南下す。両山の墻壁の如く崖嶮天を摩す。中間坦夷にして、邑居田園高低相接す。心甚だ其の形勢を異とす。既に飯田に入り、故人丸山仲肅の家に宿す。席の間に傍らの近くの山水を叩う。仲肅盛んに、下川路天龍峽の奇を説く。而して座人往々にして之を沮む。余も亦遲疑す。淹留十日すると將に去らんとす。仲肅曰く、子何ぞ一勞を憚りて、佳き山水に負くに忍んやと。乃ち勉めて其の勝を探る。

行くこと二里ばかり、郷医関島氏を訪う。主人、真に愛す可く、率いて峽口に導きて至る。百丈の断崖折裂して斧劈の如し。平遠の水、此に至りて、頓かに巉巖の窄る所、奮騰して洄湫たり。鉛鋒の向かう所、石皆辟易す。猶怒るに勝えず、則ち往々倒流す。主人、大石上に延踞す。須臾にして、童兒四五輩喧嘩して至る。瓢を負える者有り、壺を提ぐる者有り、釣具を携うる者有り。火を扇ぎ水を汲み、茶酒興を助く。余、試みに綸を垂る。底深く流れ急にして、釣餌を受けず。遂に竿を投げ、攀援して進む。崖益々高く、巖益々偉にして、峽勢亦、益々逼仄す。緑樹横生し、雜るに松竹を以てす。□（髪かんむりに監）鬢水中に倒影し水受けて之を蕩し、潭と為り瀬と為り、鞞鞞鼓奏す。水は碧く、崖は碧く、草樹皆碧なり。頭上を仰ぎ望めば、天亦蜿蜿として一碧流を為す。時に躑躅の花盛んに開く。濃朱乱点にして、峽に満つるを見るが如し。景は一つとして画く可からざるなし。而して画も亦及ばざる者有り。会ま老翁有りて巖下に漁す。斑白偃僂も、亦画図中の物なり。呼びて籃を窺えば、小魚僅かに三尾有り、乞うて之を得る。乃ち崖の最高處を相し、童兒に命じて、地を掃い席を設け、更に榛莽を開きて勝を求む。峽己に幾轉變、態百出して氣象亦蕭森なり。前崖に一巨巖潭底より拔起す。直立数十丈、高く崖上に出ず。古松を蒙り翠篁を佩び、筋骨倒張して、勢い雲を穿たんと欲す。我依る所の巖壁も亦、極めて獐狎なり。而して目睫の觀、転た全形を窺う能わず。殊に惜しむ可しと為す。下流を回顧すれば、峽勢宛転、窺りて又通じ其の奇画す可らざるなり。再び崖上に登れば、則ち童兒の待つこと久し、魚を炙り盃を伝え、且つ眺め且つ飲む。主人日影を顧て帰るを促す。余、尚恋々として回顧し、其の家に帰れば則ち日全く没す。夜話峽に及ぶ。主人曰く、地秋葉山を距ること二十余里、峽勢連亘し、其の奇往々今日觀る所の如し。但だ危険特に絶す。止むを得ざるに非れば舟楫を通せず。古來数々開鑿の説有り。竟に行う能れざるなりと。是より先峽名未だ定まらず。余、以為らく、川既に天龍と名づく。盛称比無し。別に名を扱ぶを用いず。且つ峽の魁奇なること彼の如し、安んぞ川、峽に由りて名を得て而して其の本を失うに非るを知らんや。因りて定めて天龍峽と称すと云う。弘化丁未四月小盡日遊ぶ。遊後一日記す。